

龍馬  
峯



三月号

第3卷 第3号

通卷 第21号

# 鷲峰目次三月号

巻頭の言葉

眼に見えないもの

和田竜昌

4

インドへ渡つた

身延山釈尊像の出来・その一

日高白象

6

仏語解釈

善 惡 不 二

川島本良

11

信仰相談室

本佛信仰と祖先崇拜・その一

日高白象

17

鷲峰教学研修座談会(続編)  
真言密教との対決

本仏釈尊と大日如来

編集部

21

# 福岡県街頭傳道布教紀行

このたびの県下伝導の意義

筑後地区・雨にも負けず

博多地区・郊外機動布教

東筑地区・轟く法鼓の威力

豊前地区・郷土に祈る

## 読者の声

宗門を背負う学生僧の道念

釈尊こそ久遠の本仏

敵をも供養せよ

鷲峰会第二期生身延山大学卒業を祝う

鷲峰会賛助会員紹介

表紙題字……身延山法主藤井日静猊下  
表紙写真……インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の釈尊像  
表紙印刷……大阪東洋印刷社長藤原秀恵氏寄進

木川住野上展示周智境  
島尾周智境  
刀許義昭輝弘暁

中藤原玄子通  
西廣子通

48 47 46 16      45 44

40 38 36 33 31

# な い も の

信仰とは、目に見えない神仏の姿を心で見、耳で聞えない神仏の声を心で聞くことです。眼にも見えない、耳にも聞えない、形なき靈界との交わり、これを信仰というのです。一般の人々には、その姿を見るこども出来なければ、その声を聞く事も出来ません。そこで、その姿を象徴として現わし、その声を經典として現わして、象徴を礼拝し、經典を読誦することによつて、形なき神仏と感應道交するのです。信仰といつても、感應なき信仰、道交なき信仰は、形式的な信仰にすぎません。たとえば、それは入るべき家のなかに入らずに、家の周囲をグル／＼廻つているようなものです。

神仏は生きています。そして四六時中、私たちを救おうとして慈悲の活動をつづけています。ところが経験主義、実証主義にもとづく科学万能の今の世の中では、「見えないから」「聞えないから」という、たゞそれだけの理由で、「神仏は実在しない」「神仏は人間の心の映像にすぎない」などと申しています。然し、それはとんでもない誤りです。超経験的な宗教の世界が、経験主義立場に立つ科学の尺度で計らうとすることこそ、それ自体、反科学的な矛盾したことなのです。

# 卷頭の言葉 眼に見え

心をとぎすました、ごく小数の宗教的聖者が、眼に見えない靈界に入り、じかに神仏の姿を見、神仏の声を聞きました。そしてその聖者の教えに従う多くの人々が、神仏の証（あかし）を体験しています。法華經の信仰は久遠の本仏釈尊が、地上のすべての人々を我が子として、一人も漏さず救おうとして祈つてやまない南無妙法蓮華經という、その声なきお題日の声を聞き、宇宙法界にひびき渡る本仏釈尊の祈りに攝取されて、声の響きに応ずるが如く、我れにもあらず南無妙法蓮華經と唱えることです。自我・自力でお題日を唱えるのではありません。日蓮大聖人が妙密上人御返事の中で、「まさに知るべし、仏の御心の、我等が身に入らせ給わば、唱えがたき題目なるか」

と仰せられたように、仏陀の大慈悲心によつて唱えせしめられているのです。唱えるお題目が本仏無作のお題目であればこそ、諸仏・諸天の來集があり、そこに大マンダラ仏界が顯現するのです。三千大千世界の虚空に響き渡る本仏釈尊の此の声なき声、我等を救わんとする題目の声に耳をすませましよう。

身延山大学三年 和田竜昌

靈鷲山と身延山

インドへ渡つた

身延山釈尊像の由来

その一

日高白象



釈尊像の原型

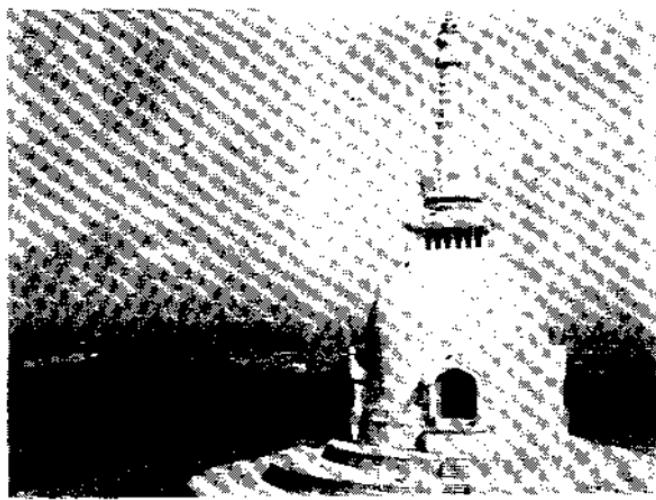
このたびインド玉舍城仏舍利塔の正面本尊として、  
去る一月二十三日に身延山を出発し、二月一日、三井  
船舶の奈良山丸で、横浜港よりインドへ送られて行つ  
た、身延山金剛の釈尊像については、次のような古い  
由来と、尊い物語が秘められています。まず、その由  
來から述べてみると致しましよう。

実は、この釈尊像の原型は、もと身延山奥之院

ところが、京極信濃守高勝が、

△一体どういう人物であつたのか▽

△また如何なる理由で建立されたのか▽



靈峰富士に向つてそびえる  
日本一の御殿場仏舍利塔の威容

ということについては、これまで調査のいとまもなかつたゝめとはいへ、皆目、見当もつないような状態でいることは、誠に申訳もない次第ですが、然し、その姓を京極と名乗つている以上、おそらく名門京極家の系譜につらなる人かと予想されるところから、その系譜をたどつて行けば、或は高勝の存在をたずねてその事歴の幾分なりとも、うかゞい知ることが出来るかも知れません。今後の調査にまつべきです。

ところで、この靈廟は、その当初、三光堂のすぐ北側にある、スリバチを伏せたような、丸い山の頂上に安置され、靈峰富士山に対していました。

こゝは奥之院思親閣へ登る参道中、はじめて富士山を望むことの出来る風光明媚な場所でもあり、また眼下には、曾つて日本三大急流どうたわれた天下の富士川を見おろすことも出来る、雄大な展望を誇る場所でもありました。

今でこそ奥之院思親閣へは、麓よりかけられたロード

アウェイを利用する人々が多く、この参道を登る人は少くなりましたが、曾つて奥之院登詣の信者はすべて現在の三光堂の堂宇の南側を通つて露座仏の前に至り、祝尊像をおがんでから、この雄大なる風光を楽しんだものでした。

なお台座の刻銘によれば、明和九年（昭和四十年より一九三三年前）六月、身延山第四十五世、寂隆院日應上人の代に、この露座仏が再興されたことを知ることができます。

これは、おそらく身延全山も大災害をうけた、かの有名な明和の大地震による被害のためであったことでしょう。三光堂の住職の語るところによれば、その後も、しばし修復が加えられたということです。ところが、何時の頃かは判然としませんが、奥之院参道も近道から近道をとるようになり、三光堂の南側から露座仏の前を通つた背ながらの道も、三光堂の前から露座仏のうしろの、はるか下の方を通るように改

められてしましました。このため必然的に露座仏も三光堂の前の現在地へ移されて、今日に至つたのです。然し、せつかく三光堂の前へおりて来た露座仏も、多年の風雪にたえかね、殊に戦後においては修理を加えるいとまもなく、金剛の全身に生した亀裂は、年と共にひどくなり、ひとたび地震にでもあえれば、バラバラに全壊してしまうのではないか、と恐れられるほど痛んでいたのです。

### 堀内貞良氏の悲願

この露座仏を、原型通り、寸分もたがわざ復元したのは、身延山大本願人（東京三徳KK社長）堀内貞良氏ですが、そのイキサツには、およそ次のような物語があります。

かねて堀内氏は、自分の生れ故郷である静岡県御殿場市の東方、長尾峠より下りて来る山腹に富士に対して大仏舍利塔を建立することを発願していました。

それは、日本の國土を象徴する靈峰富士山麓に、法華經の見宝塔品の事相さながら、本仏教の大仁舍利塔を涌出して、日本國の本国土妙の儀相を整えると共に、この宝塔を通して、末法万年、日本全國民をはじめ全世界の人々をして、法華經に帰一せしめるることを願い、その功德をもつて郷土の恩に報いんとするものであつたのです。

昭和三十六年八月二十五日、仏舍利塔建立敷地において、身延山よりは望月總務、宮家よりは秩父宮妃殿下をはじめ、インド・セイロン・ビルマ・タイ・ガーナー等々の各国大使夫妻、ならびに衆参代議士等々の名士來賓臨席のもと、國際色も豊かな仏舍利塔定礎式が、盛大にいとなされました。

この落慶式は、丸三年後の昭和三十九年七月二十三

日、身延山法主猊下をはじめ参列した各國大使は十二ヶ国、代理大使は四ヶ国、代理書記官は十ヶ国の多きを数え、折から来朝していた世界宗教者平和會議参加

者も列席して、本尊の秋草の大慈悲のもと、通一仁上の事相がこゝに現成したかのような大仁事となりました。中天高くそびえ立つ宝塔の高さは四十七メートル五十五、ドームの直徑は二十メートル五十、基部の直徑は四十五メートルという、文字通り日本大一の仏舍利塔でした。

この間、堀内氏は工事の陣頭指揮をとり、数百名の三徳社員は、法數をうちながら交代制で作業に従事しました。費用は人件費を除いておよそ一億円。もとより他に寄附を求めたものでもなく、三徳たゞ一社のみで築き上げた宝塔でした。然しその涌現は、金錢の問題ではなく、全社うつて一丸となつた、血と汗と、そして祈りに感應されたみ仏の計らいであつたことは申すまでもありません。

蓋し、この工事の始めに当つて、堀内氏が最も心を痛めたことは、仏舍利塔の四壁、東西南北に安置する四枚の釈尊像の中、正面御本像として安置すべき釈尊

像の尊容は如何にあるべきか、ということでした。

もとより釈尊像の後背には、建治二年の元口、身延

山中において日蓮大聖人が、経一磨宮(後の龍華日像上人)に与えられた「今此三界の大マンダラ」を、銅板浮彫刻りして掲げることに決定していました。

本当に仏像を造つてしまふところぢやう。然しあた  
はあきらめませんでした。

然しその尊像には種々の尊容があります。その中の一つを選ばねばなりません。さつそく堀内氏は全国にワラヂをはきました。そして関東一円に、或は京都、奈

良方面にまでも、古刹をたずねては釈尊像の尊容を拝観して歩きました。京都經原野の清涼寺に、三国伝米の釈尊像が安置されていると聞いて、わざわざたずねて行つたのは、昭和三十六年九月なればのことでもある。

りました。

然し、何処を、どう訪ねてみても、仏舍利塔正面の本尊としてふさわしき釈尊の尊容にあうことはありませんでした。

普通の人であつたならば、この辺であきらめて、適

何卒、仏舍利塔の魂ともいわるべき正面御本尊の、  
釈尊像の御尊容にめぐりあわせて下さい。私の願いは  
ひたすら仏祖のみ心にかなわんとする願いばかりでござ  
ります。△

## 善 惡

## 不 二

ニワトリが先きか?

タマゴが先きか?

身延山大学三年 川島本良



子供たちのナゾ／＼アソビの中  
で、

「ニワトリが先きか、タマゴが先  
きか……?」

という珍妙無類・奇妙キテレツ

な問答ゴツコをしているのを、御  
覽になられたお方もいらっしゃる  
ことをいますが、若しも貴方が

こういう質問をお受けになられた  
ならば、貴方は、どのようにお答  
えになられますか。

たいていの人たちは、

「ニワトリが先だ」

と必ず、どちらか一方を言い張

ります。そして互に主張をゆずら

ず、だん／＼話は、生物進化の過  
程から、宇宙創造の昔にまで、さ  
かのぼって、結局は何が何だか、  
さっぱり証が判らなくなってしま  
い、この問答も、勝負なしの笑話  
に終るのが、オチになっています  
だからこそ、楽しいナゾ／＼ア  
ソビの一つになつてているのでしょ

うが、然し實際は、笑いごとではないのです。

何故ならば、この中に、因果不二・善惡不二という仏教の大法門を説き出す糸口が秘められているからです。

☆

通常、

「二ワトリが先きか、タマゴが先きか」

という質問それ自体には、既に解答者に対して、どちらか一方を答えさせようとする、ワナがしかけられています。

人々は、つい、そのワナに引っかゝってしまいます。そして一旦言い出した自分の説に固執して、

意地でも自分の主張を通そうとするのです。  
こゝにナゾ／＼ゲームの楽しさや面白さがあるのですが、実は、こうした一方的な物の見方は、何処まで行つても果しのない二本のレールのようなものであつて、これを相対的な物の見方というのです。

相対的な物の見方には、必ず時間の経過・流転といふものがあります。今日只今のこの現実こそ前後際断した絶対なものとして、過去をもかえりみず未来をも予想せず、むしろ悠久の過去も、永遠の未来も、同時に包括内在した存在として、その足下に、すべてのものを、そのまま絶対肯定する立場です。

「右も否定し、左も肯定し、右が

なければ左もない。左がなければ右もない」

という肯定・否定・絶対肯定の物の見方です。

「ニワトリが先きか、タマゴが先きか」

というように、時間の経過を予想しながら、一方を肯定して他方を否定するという、そういう相対的見方より越し、今日只今、この現実において、

「ニワトリがなければタマゴはない。タマゴがなければニワトリもない。どちらが先きでもなければ不二なるものである」  
という見方に立つのです。

このことは、善と悪の場合でもません。☆

同様であつて、悪を否定して善のみを肯定するのではなく、「悪なれば善なし。善なれば惡なし」

という相関関係から、

「善は惡によつて磨かれ、惡は善によつて反省する」

という相資の関係へと進み、更に、善惡の対立を超えた絶対なる立場から、

「善を絶対善に昇華せしめ、惡も

絶対善の中に蘇生せしめる」

ということになるのです。

悪を蘇生せしめるもの、それは極悪なるものとの対立は、法華經の第十二章提婆達多品において、「提婆達多が善知識によるが故に

善惡の対立した世界を超越して善惡不二なる絶対善に住した人、その人こそ仏陀釈尊でした。

釈尊の在世當時、千人斬りの悲願に狂つた殺人鬼アングリマーラも、釈尊に出あうや、その場で崇高な仏弟子となつております。また人の子を取つて食つた鬼子母も釈尊に出あうや、正法守護の神として蘇生しています。

「釈迦と提婆」

という、この極善なるものと、

極悪なるものとの対立は、法華經の第十二章提婆達多品において、「提婆達多が善知識によるが故に

我れをして六波羅蜜、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、四無所畏、四攝法（しようぼう）、十八不共（ぶく）、神通道力を具足せしめたり。

等正覺を成じて、広く衆生を度する」と、みな提婆達多が菩薩に因るが故なり」

と仰せられた釈尊みずからの方に知見、この善惡不二なる絶対善によつて、見事に解決され、

「未來世の中に、若し善男子、善女人あつて妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、十方の仏前に生せん。

所生の處には、常にこの經を聞かん。若し人天の中に生るれば勝妙の業をうけ、若し仏前にあらば蓮華より化生せん」

極悪無道の敵でさえも、攝取蘇生せしむる絶対的な仏徳をいうのです。

☆

というように、本仏釈尊のかゝる仏知見を仰ぐすべての者の、救済が説かれるに至つてゐる。法華經第二十章の常不輕菩薩品には、常不輕菩薩がすべての人々を札拂し、罵詈打擣（めりぢようぢやく）する迫害者にも、札拂を借まなかつたことが説かれていましたも申せましようが、これを一口にいふならば、日蓮大聖人の御指南の通り、妙法蓮華經の五字七字すが、それは常不輕菩薩の心に、そのものにほかならないことは申すまでもありません。

このお題目は、大聖人が図頬さされた大マンダラの中に、光明点によつて三世十方法界に輝いている

善惡不二、それは単なる理論の世界のみのものではなく、たとえ

ように、毒草にも薬草にも、善人にも悪人にも、或は法華經を信じている者にも信じていない者にもあたかも太陽の光りのように、あまねく平等に光り輝いているのです。

ですから私たちは、このお題目を但信口唱しさえすればよいのです。その時、おのずから本仏釈尊の功德は、我れにもあらず我が身に備つて来るのです。

☆

私たちは、この光りを仰ぎ、この光りを我が光りとするものです。それが信仰であり、修行というのです。

然し、善惡不二なる、この偉大なる世界を、直接修行の対境とするのではありません。

偉大なる善惡不二の仏界は、既に釈尊によつて証得され、そのままで題目として私たちに授与されているのです。

で

すから私たちは、このお題目を唱えることによつて、一切に感謝し、しかも一切を蘇生せしめる自分が出来るよう、みずからの人格をつちかつて行くことです。

☆

然し私たちは、ともすれば仏陀の慈悲を忘れ、お題目を唱えているようであつても、お題目の心、この善惡不二なる心を失念し勝ちなものです。

そして相対差別感にとらわれて否定しあつたり、傷つけあつていいのが日常です。

懺悔とは、こうした自分の日常の身口意の三業を懺悔するのです。修行とは、善惡不二なるお題目を唱えるには、すべて相対的です。資本主義には社会主義というように、すべて相対的です。

そして世の中は、こうした相対するものゝ相関々係によつて展開されているのです。善と惡も、その一環にすぎません。

対立・相別は、そうしたもの一

面に固執して、他を否定するところから起つて来ます。

対立の中でも、最も深刻なもののは、人間の心奥に関する宗教の対立です。

そこで、すべての対立にとらわれず、そのいすれにも偏せず、存在するものの両面、その全体を見て、これを善惡不二なる絶対善の萬教帰一の法華經の信仰であり、この信仰が広宣流布する時、世界の平和が実現されると、申せましょ。

（△）  
よ。

筆者は本年三月、身延山大学を卒業、四月より立正大学へ転学しました。通学住所は、

千葉県市川市真間町

日蓮宗本山 弘法寺内

## 敵をも供養せよ

三月といえば彼岸、彼岸といえば餓鬼、畜生の心を供養することも施餓鬼供養が連想されるものです。忘れてはならない施餓鬼供養の大が、通常、施餓鬼供養といえば自分が、通常、施餓鬼供養といえれば自分

事なことでしょう。

うらみを返すにうらみを以つてせず却つて供養を以つて報いんとす。然し本来は、もつと広い意味でしなければならないものではないでしようか。

かれた仏子としての自己が見出されることでしよう。

木村義賢  
自分に敵なる人々の、その地獄、

# 本仏信仰と祖先崇拜

## その1

解説担当 日高白象

おたずね

も、とても我々凡夫の及ぶところ  
ではない

「法華經の本尊は、久遠実成の本  
師釈迦牟尼佛である」

とは、常々聞かされていること  
であり、

「本仏釈尊に帰依して南無妙法蓮  
華經と唱えることこそ、仏教本來  
の最も崇高な信仰である」

ということについては、何時も

△なるほど、そうだろう▽

△そうあらねばならない▽

とは思いながらも、実のところ  
少しも実感が湧きません。という

のは、

△そうした本仏信仰の教えは、如

何に素晴らしいものではあつて

△果して仏教本来の信仰なのか▽

な感じがして、

一方、祖先崇拜といえば、日本  
民族の風習からしても、最も身近  
かに感ずるものですが、然しつた  
だそれだけに留まれば、宗教学的  
にみても低級なシャーマニズム的

て一生懸命にお題目を唱えれば唱  
えるほど、本仏との距離が、ます  
ます遠くなれでいることを痛感  
するばかりで、しまいには唱えて  
いるお題目が、自分でタラマ  
イしているような気さえしてしま  
うのです。

へ日本的に変形した縁以仏教的な  
信仰ではないのか？

という疑いから、

へ迷信の域を出ないのであるま  
いが、

、という考えも持たざるを得ない  
有様です。

本仏信仰と祖先崇拜……それは

いずれも大切なものです

然し、それに対する障壁、ならび

に両者のギャップは、どうすれば

解決されるのでしょうか。おたずね

いたします。

おこたえ

自我偏の中に、

いかにも法華經の本尊は、久遠

実成の本師釈迦牟尼佛であり、こ

の本尊に向つて南無妙法蓮華經と  
唱える」とこそ、法華經信仰の真  
髓です。

然し、この本仏信仰に対して実  
感がなく、ほど遠い距離を感じる  
ということには、およそ次の二つ  
の理由があるのでしよう  
か。

1

へ一、釈尊に対する恋慕渴仰

それは貴方自身、釈尊に対する

恋慕渴仰の心に欠くるところがあ  
るということです。

けです。

然し、これには「時に」という

条件がついています。その時とは  
いうまでもなく、

「時我及衆僧俱出靈鷲山」

時に我れ及び衆僧

ともに靈鷲山に出ず

という經文がありますが、こゝ

にいう「我れ」とは、久遠の本仏、  
釈尊のことであり、「衆僧」とは、  
その眷属の無量無邊なる僧侶のこ  
とであり、「靈鷲山」とは、當時  
のインドの靈鷲山という山のみな  
らず、仏滅後、法華經を持つ即は  
道場の当所をいうのですから、法  
華經を信じ、お題目を唱える当所

に、久遠の本仏釈尊と、その眷属  
である無量無邊の僧侶が出現し、  
感應道交の常寂光士が現前するわ

衆見我滅度 広供養舍利

咸皆懐恋慕 而生渴仰心

衆生既信伏 賢直意柔軟

一心欲見仏 不自惜身命

衆、我が滅度を見て

広く舍利を供養し

ことごとく皆恋慕をいたいて

渴仰の心を生ず

衆生既に信伏し

賢直にして、ころ柔軟に

一心に仏を見たてまつらんと  
欲して

みずから身命を惜まず

ということです。

然し、如何に「一心欲見仏不自  
惜身命」ではあつても、その心に

本仏釈尊に対するやむことのない  
本仏釈尊に対するやむことのない

恋慕渴仰の心がなければなりません。

この心なくしては、如何にお題

目を唱えても、所詮、カラマイす

るほかないでしよう。

## 2

次に挙げられる理由は、  
△△△お題目は本仏釈尊の功德体  
であるということです。  
そのものであるのですから、決し  
て手段ではなく、むしろ目的その  
ものであり、問題の当所、一步も  
行かずして、既に本仏の仏界は、  
現前されるものであるはずです。  
お題目は、単なる大自然の哲理  
でもなければ、天台・伝教のもの  
でもなく、また大聖人のものでも  
なく、実に久遠の本仏釈尊の内証  
功德そのものであることを、はき

一口にお題目といつても、天台  
伝教の唱えたお題目もあれば、日  
蓮大聖人の唱えられたお題目もあ  
ります。

そして大聖人の唱えられたお題  
目は、天台・伝教のように、お題  
目を手段として仏陀に迫るという  
ことです。

物ではなく、觀心本尊鉢に、  
釈尊の因行果徳の二法は、  
妙法蓮華經の五字に具足す  
まゝ到達すべき仏陀の内証、功德

以上、二つの欠如を反省し、一

心に仏を見たてまつらんと欲して  
みずから生命をも惜まない恋慕渴  
仰の心が、絶対信にまで昇華する

時、その刹那にこそ、既に三千年

前に亡くなられたはずの本仏釈尊  
は、その無量の眷属をつれて、み  
ずから自我偏の中に、

「而実不滅度 常住此說法」

しかも実には滅度せず

常にこゝに住して法を説く

といわれているように、仏滅後

三千年の時間を一挙に超越して、

私たちの眼前に出現されるのです

それは言語に絶する莊嚴な本時  
風光でありますよう。私たちは、

感きわまつて、ひれ伏し、大音声  
に感動のお題目を唱えずにおれな  
いことでありますよう。

そして、その中にあつて、はじ

めて本仏釈尊と父子一体となつた  
自己]本来の不滅の生命(いのち)

次は祖先崇拜について、特に本  
仏信仰と祖先崇拜との関係につい  
て、述べることにいたしましたよう

に歓喜することが出来るのです。

## 親と子

我こうが頭くらべは父母の頭

我こうが足あしづは父母の足

我こうが十指じゆは父母の十指

我こうが口くちは父母の口くちなり

譬たとえば種たね子こと果こり子こと

身みと影かげの如ごとし

(日蓮大聖人の言葉)

## 真言密教との対決

—本仏釈尊と大日如来—

### 編集部

この座談会は、去る一

月八日より十一日まで三  
泊四日間、波木井の醒悟

和田 大日仏身観

園本妙庵において開催し  
た第二回鷲峰教学研修会  
中に行われたもので、本  
誌二月号に掲載した座談  
会の続篇である。

とが出来る。

川島 また、その対決によつて、  
はじめて真言亡國の所以も、法華  
經の真偽も明白になつて来よう。

木村 法華經の諸法実相観と、真  
言の六大円融觀、ならびに法華經  
の久遠の本仏觀と、真言の大日法

身觀、これは諦然と區別さるべき  
ことを破折することによつて、  
真言の即身成仏思想も破折するこ





佐々木 詳しいことは、テキスト（宇井伯寿著：「仏教哲学の根本問題」）の第五十八頁に、次のように述べられている。

少し長くなるが、一往そこを読んでみよう。

「大日如来の六大も、我々の六人も、互に無形に内涵渉入して居つて、従つて大日如来即我々となるし、大日如来も我々も、六大所成の外の何物でもなく、また他の一切のものもそうであり、草木国土までも六大所成であるから、大日如来と我々と全く異なるものではない、となすのである。」

この説は、即ち即身成仏説の基調ともなつて居るものであるのみ

ならず、六大法身上といわれる如く、六大はそのまゝ法身であつて大日如来に外ならぬとせられるのとが、いうのではなくして、六大は大日如来の象徴であるとか、または譬喻的に大日如来と見るのであるとか、いうのではなくして、六大がそのまま大日如來たるのであり、宇宙は全く大日如來に外ならぬとなすのである。

従つて、大日如來は大宇宙、我々は小宇宙、と考えてもよいであらうし、同時にまた、我々が大宇宙、大日如來が小宇宙であると見てもよいのである。」

和田 悠久なる大自然、こゝに、始めもなければ終りもない久遠の大生命がある、というのが眞言の本尊観なんだ。

藤原 然し、それは眞言だけでない

く、日蓮宗の中にも没透している

考へではなかろうか。

川島 然し、そこには理想もなけ

れば自己反省も起り得ない。たゞ

自然のまゝの現実肯定があるだけ

だ。

しかもその肯定は、観念的な言

葉の綾によつて美化され、カムフラージュされている。

人間の愛欲も、六欲煩惱も、悉

く菩提そのものであり、貪瞋痴の

三毒も即不繫、それ以外に、別に

菩提もなければ不繫もない、と主

張するようになつてしまふ。

近藤 恋愛もセックスも菩提不繫

飲酒放吟も無作仏事（爆笑）

石川 いゝ調子。（爆笑）

石川 だから密教なんだ。

藤原 然し、何事も調子のいゝは

ずはない。天災にあつたり、病氣

になつたり、人生は自分の思うよ

うには行かないものなんだ。

佐々木 だから、そこに真言密教

独特の加持祈禱が起る。我欲のた

めには、どんな祈禱でもする。自

分に敵する者は、かたづばしから

呪い倒す。

武内 真言の祈禱ではゴマをたく

が、ひどい祈禱になると、人骨や

獸骨もたくそうですね。

小田 恐しい道具立てがそろつて

いる。火の中に猛毒を入れたり、

人形（ひとがた）を油で煮つめた

り……。

和田 しかも祈禱内容によつて、

それぞれ本尊が違つてゐる。愛欲

を祈る時は愛欲の本尊。人を呪う

時は呪いの本尊。本尊は皆、恐し

い形相をしている。顔がいくつも

あつたり、手が何本も出ていたり

……およそ合掌した柔和な仏像な

んで、ありやあしない。

小林 それは人間の欲望を認めて

たとえよこしまな我欲でも満足せ

しめようとするから、真言の神々

は、この世のものとも思われない

無氣味な恐しい形相とならざるを

得ない。

石川 悪鬼・悪靈、亡國の姿だ。

## 一門の本尊と

### 普門の本尊

木村 そうした神々を、真言では

「一門の本尊」といつて、一機一  
縁の願望を満足させ、これを通し

て「普門の本尊」である大日如米  
に帰依せしめようとしている。

「一即他」「個と全」という仏教  
理論もあるが、「一門の本尊」群  
は、普門の大日法身の分身であり  
同時に別のものではなく、大日法  
身を構成する単位になつてゐる。

小田 すると「一門の本尊」に帰  
依することが、同時に「普門の本  
尊」に帰依することにもなるわけ  
ですね。

小林 そこが法華經と根本的に違  
います。

つてゐる。法華經でも三世十方の

諸仏を、本仏釈尊の分身とは言つ  
てゐるが、決して同体ではない。

また無量無邊の諸天菩薩も、本

仏釈尊の分身ではない。

子が親に仕えるように、弟子が

師匠に仕えるように、家来が主君

に仕えるように、諸仏も諸天も、

それ／＼唯一絶対なる本仏釈尊に

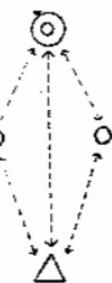
帰一するという、そういう関係に

なつてゐる。

これを図解すれば、およそ次の

ようになりますいか。

一、真言の場合



○は久遠の十仏釈尊

○は諸仏・諸天

△は我々人間

この兩者は、いずれもマンダラ

といわれているが、然し日蓮大聖  
人のマンダラと真言のマンダラは  
根本的に違つてゐる。

川島 要するに、大日如來は三界  
を体とし、本仏釈尊は三界を越え  
て、しかも三界を知見する、とい

輪は普門の本尊

○は一門の本尊

△は我々人間

### 一、法華經の含場

う相違だろう。

真言では個の全体帰一を説き、法華經では諸仏・諸天・人間をもふくめて、すべての者が、本仏釈尊に帰一して、仏知見を受持することを説いている。

### 真言の「事の法門」と

### 法華經の「事の法門」

藤原 テキストの第六十頁には、真言における理と事の関係を、次のように説明している。

「(真言は) 理勝事劣の考でなくむしろ理を除いて事を主とし、事において完全性を認めたものと言い得よう。如何に譲つても、理即事、いな事即理で、事の一々に、

直ちにそれに即する理を見て居るのであって、理によつての事を見て居るのではない、といわねばならぬ。

即身成仏で見るも、事の当相に仏を見るのであるから、六大法身の義に根柢を有するのである」

もとより理は平等理性、事は差別現象をいうのであるから、差別現象の奥に、平等理性をたずねると

ことだ。

小田 すると本仏釈尊を通して、

事々円融の法界に入ることですか

川島 いや、そうではない。それ

だつたら本仏釈尊も、真言でいう

「一門の本尊」になりさがり、円融法界が「普門の本尊」ということになつてしまふ。

的な相違がある。

武内 それは?

藤原 真言ではさつき川島君が言つたように、事々無碍の円融事象を、直ちに大日法身の当体として

いるに対して、法華經では本仏釈尊の仏知見常照の当所としている



秘められた本仏の法華經があり、  
釈尊の法華經は昨年の暦で末法の  
役には立たない。

だから釈尊は脱仏であり、本仏  
の法華經を末法に弘めるべく、日  
蓮大聖人が本仏として出現された  
のだ

と説いている。

そこで若し、日蓮宗の中でも、  
「教観相対」「文底秘沈」の如き  
思想を持つ者がいたとしたならば  
それは創価学会と同調異曲のもの  
である、というソシクをまぬがれ  
得ないだろう。

## 仏子の道

木村 真言では三界を、六日如来

の当体とし、森羅万象も一切衆生  
も、悉く大日如来の一分のあらわ  
れとみなしているが、然し三界は  
矢張り火宅の三界であり、人間は  
弱肉強食の社会苦にあえぎ、人間  
苦・人生苦にのたうつているのが  
実体だ。

如何に、

「大日如来の分身だ」

と言つて、それらしく真言の印  
を結んでみたところで、この人間  
苦・社会苦を解決するものは、呪  
咀的な密教祈禱しかない。

近藤 真言で最も欠けたものは、

林野に安處せり

人間菩薩道だ。

川島 真言には菩薩道の起りよう  
がない。もとより人間は皆なホト

ケさまだ、というのだから。

小林 これに対しても法華經では、  
三界は安きことなし

なお火宅の如し

衆苦充满して甚だ怖畏すべし

常に生老病死の憂患あり

かくの如き等の火

熾然としてやまず

と、はつきり三界の苦惱を苦惱  
として認め、その中にあつて、

如來は、すでに

三界の火宅を離れて

寂然として閑居し

と、本仏釈尊の起在を明らかに

し、更に本仏釈尊と三界ならびに  
人間の關係を、次のように示して

いる。

藤原 我々人間は、凡夫ながらも  
本仁积尊の仏子として、仏陀となる  
可能性を有しつゝ、円融の仏界  
に生かされている。

皆これ吾が有なり  
その中の衆生は  
悉くこれ吾が子なり  
しかも今この處は  
もう／＼の患難多し  
たゞ我れ一人のみ  
能く救護をなす

ここで「三界は皆これ吾が有なり」というのは、大日如来のよう  
に三界を体とするというのではなく、  
三界を慈愍照覽・哀愍教護の  
所としている、という意味なのだ  
こゝに本尊の慈悲を主師親の三德  
として仰ぐ「仏子の世界觀」が展  
開している。

藤原 我々人間は、凡夫ながらも  
本仁积尊の仏子として、仏陀となる  
可能性を有しつゝ、円融の仏界  
に生かされている。

佐々木 だから法華經が「教菩薩  
法仏所護念」といわれる所以だ。  
石川 法華一乘による菩薩道の実  
践、そこに法華經の眼目がある。  
和田 真言は六次縁起思想から、  
直ちに凡夫即如米といふ、煩惱も  
そのまま菩提と肯定したため、仏  
と人間の間には、実践すべき菩薩  
道を抜きにしてしまった。

小林 法華一乗による菩薩道の実  
践、それ以外に、人間の教われる  
道はない。

川島 これは聞いた話しだが、イ  
ンドでは仏教の理の根本になつて  
いる空觀思想を説いても、かねが  
ねヒンズウ教の者は、  
「仏教がヒンズウ教の教理を盗ん  
だのだ」

そしてその結果は、姪卑な加持  
祈禱に走り、亡國の宗教として社  
会人心を毒することに至つた。  
学者でもヒンズウの空觀思想を破折

出来ないそ�だ。

その中にあつて、ヒンズウ教徒

を仏教に改宗せしめるキメ手は、

釈尊こそ久遠の本仏であるという

ことゝ、布教者の人間礼拝に徹し

た菩薩行以外、何ものもない、とい  
わわれている。

小林 法華經の常不輕菩薩道だね

木村 不輕の菩薩道は、一切の信

仰を開会する。と同時に本仏釈尊

は三世十方の諸仏も諸天も開会す

る。仏・法・僧の三宝は本末一体

不二のものだ。

宮下 本仏釈尊のもとには、大日

如来も阿弥陀如来も、すべての神

神も統一されている。これがまこ

との円融仏界、万教開会の道は、

既に本仏釈尊によつて完成されて  
いる。

△おわり△

日高師の「自我偶講義」は、  
昨年十月号より始まり、目下、

久遠の本仏と人間釈尊の関係が  
明かにされて、各方面に多大な  
反響を呼び起しておりますが  
三月号は紙数の都合上、休載さ  
せて頂きました。

つゞいて四月号より続載いた  
しますが、どうか熟読玩味して  
下さいますよう、お願ひ申上げ  
ます。

なお法華經の本尊觀について

は、本誌随所にもふれて来ます  
ので、本誌全体を御愛読下さい  
ますように。

△断り△

身延山大学三年

藤原成憲 佐々木友学

小林白峰 川島本良 木村義質

和田龍昌 宮下鎮嘉

身延山大学二年

石川義治 近藤達也

身延山高校三年

小田泰博

身延山高校一年

武内祥起

# 福岡県 街頭伝道布教紀行

新春2月9日～16日

このたびの

## 県下伝道の意義

福岡県宗務所長

木島智境

去る二月九日より十六日まで一週間、福岡県下、筑後・博多・東筑・豊前の四地区にわたりて街頭伝道布教が、県内日蓮宗寺院檀信徒うつて一丸となつて、果敢に展開されました。

これは昨年の正月四日より同じく一週間、県下一円に敢行された初の街頭布教に次ぐ第二回の伝道でした。前回は身延山学生別動隊

が、わざ／＼西下し、これが中心となつたものでしたが、今回は県内日蓮宗が自主的に立ち上り、かねて布教師会と青年会によつて組織されていた伝道隊が中心となり宗務所が後援したものでした。

その準備は、昨年の暮頃より始められ、身延の商店より白の地下足袋と手甲・脚絆が、それ／＼二十人分用意されました。これは前

回の伝道直後、身延山街頭布教別

勧隊の主力となつてゐた警峰会から、布教中の淨財の中より網代笠二十人分を寄贈されていたことにあわせたものでした。

幸い布教当日には、街頭布教のペテラン日高白象師が、はるゝ、

身延より隨喜参加されました。

折悪しくその頃は、身延の学生が年度末の試験中であつたため、日高師は單身ではありましたが、然し、一騎当千の味方を得た思いのしたことでした。

かねる、福岡県寺院は、日蓮大聖人の如く、街頭に進出して擊鼓宣令し、立正安國の大義を大衆に宣布すべき念願に燃え、携帯マイ

クなどを用意していました。

とでした。

そこへ昨年正月、身延山別勧隊の西下があり、これを契機として同年の夏休みには、日高師をはじめとして數名の身延山の学生が、北九州における行学研修布教にも来られ、つゞいて本年二月、いよいよ今度は県下寺院がみずから立ち上つて、昨年に劣らぬ堂々たる

街頭伝道布教を、みずから團結の力によつて展開したのでした。ここに今回の伝道の意義がありますが、それと同時に、今後、少くとも毎年一回は、県下一円の街頭布教を実施するという自信が、

今度の布教を通して寺院、檀信徒のすみる、までも、みなぎつたこの

「我々は身延山を總本山と仰ぐ日々も、」  
「蓮宗である」

「我々は身延山を總本山と仰ぐ日々も、」  
「蓮宗である」

テラン一、二名の西下を願つて、  
「身延山を本とするところの日蓮  
宗である」

ということを、名実ともに一般  
大衆にも強く印象づけしめると  
同時に、県下の日蓮宗自体にも再  
認識せしめるという討論が沸騰し  
たことは、大いに意義あることで  
あつたと思う次第です。

なおまた今度の布教中、街頭お  
よび寺院における布教師の堂々た  
る説法が、あたかも、布教講演会  
の如く華々しかつたこと、並に青  
年会が指揮した整然たることは、  
瞠目すべき成果であつたことは、  
「なせばなる」  
という自信を深くしたもののです

然し如何に地方布教が活発とな  
つても、これが全国的に統一され  
ねば宗門全体の力とはなりません  
宗門の信仰の中心が身延山にある  
以上、身延山を本として、各地方  
の特色を生かしつゝ布教が展開さ  
れるならば、それがそのまま宗門  
全体の布教となりましよう。

身延山に頼らず、しかも身延山  
を本とした街頭布教を、全国にさ  
きがけて展開した栄光が、今回の  
福岡県下街頭伝道にあるを喜ぶと  
共に、県下寺院・布教師会・青年  
会、そして檀信徒の労を感謝し、  
次回のより成果ある布教を期待す  
るものであります。

### 筑後地区

### 雨にも負けず

—— 鎌西身延本仏寺内 ——

佐野前曉

今回の第二次福岡県下街頭伝道

切りに展開されました。

布教は、二月九日、筑後地区を皮

前日来、木島宗務所長は北九州

から、日高布教師は身延山から、また当日ともなれば、昨年三月身

延山大学を卒業した鷲峰会の小寺

君は熊本から、博多地区青年会よりは代表三名が、それとも応援に駆けつました。

当日の布教責任者は久留米妙正寺の田中潮栄師、主力は筑後地区伝道隊。

コースは前回実施した久留米市内を除き、その周辺の福島、黒木・矢部・笠原・羽犬塚・清口といふ順序。布教個所はバスで結ぶことにしました。

僧陣はおよそ二十名、全員手甲脚絆に身をかためて全行程に参加し信徒は各町村ごとに、その地に

おける行進に参加することになつていました。

さて午前八時、八女市福島町井

上仏具店前に集合した伝道隊は、降りしきる雨のあがるものも待ち切れず、直ちに布教開始。こゝは筑後地区創価学会の発祥地であるだけに、完璧なき学会折伏が獅子吼されました。

それは、これから始まる一週間の県下伝道にさきがける第一声であり、さながら七百年前鎌倉街頭に獅子吼された日蓮大聖人の姿が彷彿せしめられるほどでした。

コースは前回実施した久留米市

内を除き、その周辺の福島、黒木・矢部・笠原・羽犬塚・清口といふ順序。布教個所はバスで結ぶことにしました。

福島の警報宣令後は八女郡黒木町。宣伝カー、バス二台・自家用車の群をつらねて黒木の入口にさ

しかばねば、ます／＼降りしきる雨の中、町内檀信徒は傘もさらず太鼓をうつて待機していました。

鼓行進は、商店街を通り、町はずれにある天然記念物、樹令七八〇年といわれる藤の大木の下までつづき、これより再び車で、矢部川の渓谷にそつて北矢部の本興寺（住職村越智秋師）へ向いました。

途中、鏡光地ともなつてゐる日向神（ひゅうがみ）ダムの大きな湖のそばを通りましたが、その昔天孫民族が日向（宮崎県）の高千穂へ向う時、こゝを通過したとい伝えられている所です。そびえ立つ峰々は、雨にけむつてしま

た。

本興寺についたのは、予定より二時間も遅れていましたが、こゝの檀信徒もまた、やむこともない雨の中、二時間も立ち通しで待機していたことには感動のほかはありませんでした。

こゝで、茶菓の接待に、冷え切った体を温め、雨中、マイクを通して山間の道路説法をしましたが説法は山々にイン／＼としてこだましていました。

これより、雨にぬかるんだ悪道をついて、同郡笠原の大善坊へ向い、住職松本慶明師をはじめ檀信徒の手厚い昼食の御供養をうけ、

感銘深い講話布教後、伝道隊は再

び車をつらね、道を引きかえして福島を通り、筑後市の溝口の福王寺（住職末崎智降師）に参拝。

講話布教後、同市和泉の妙法寺（住職末崎智降師）に到着した時は既に夕闇も迫っていました。

こゝで講話布教後、夕食の御供養をうけて、解散したのは午後六時、日はとつぱり暮れていきました。

保坂君は以前、天台宗の僧侶として比叡山で修行していました。昭和三十八年正月四日、日高師を陣頭とした鷺峰会の学生僧十數名が、法鼓をとどろかして根本中堂に参拝し、雪をけり吹雪をついて大聖人の旧蹟である横川の定光院へと降つて行きました。中堂の受付に残した教義には、

「極樂百年の修行は、穢土一日の功徳に及ばず」

という大聖人の遺訓を、身をも

つて色読した注悦にひたつていました。

布教中のエピソードは数々ありますが、その中、本仏寺の仏門に入つた保坂前輪君が、終始日高師の直ぐ後について擊鼓していた姿は、如何にも印象的でした。

保坂君は以前、天台宗の僧侶として比叡山で修行していました。

昭和三十八年正月四日、日高師を

陣頭とした鷺峰会の学生僧十數名が、法鼓をとどろかして根本中堂に参拝し、雪をけり吹雪をついて大聖人の旧蹟である横川の定光院へと降つて行きました。中堂の受付に残した教義には、

「一、人間礼拝に徹することこそ

信仰実践の極地である

## 博多地区

一、祈りなき平和はありえない  
敵をも慈しむ心を深めよ

永遠の光りはその祈より生ず  
と、したゝめられてあつたそう  
です。

保坂君は深く心に感するものが  
ありました。直ちに彼は比叡山を  
下りました。そして故郷福岡県に  
帰り、程なく鎮西身延本仏寺に出  
家したのでした。 △元△

法華經を余人の詮み候は、口  
ばかり言葉ばかり読めども心  
は読まず、心は読めども身に  
読まず。

色心二法共に遊ばされたるこ  
そ貴く候へ △土龍御書△

布教は二月十一日、その日は紀元  
節復活の可非をめぐつて論議され  
ている日でもありました。雨の  
氣後に較ぶれば小春日和のような  
上天氣でした。

午前八時、市内今川町の大通寺  
に集つた地区寺院各聖およそ三十  
名は、書院で居士衣・五条・手甲  
脚綽に身を固め、檀信徒はタスキ  
を

## 博多本長寺 川上展弘

がけで本堂前に集合し、筑後地区  
からは青年僧三名が応援に駆けつ  
けて来ました。この日の布教責任  
者は、大通寺住職永野見龍師。

午前九時、木島所長の力強い挨

拶あつて行動開始。伝道隊は隊伍  
整然、今川町を撃鼓行進してから

待機中のバスに乗り、郊外に当る  
野芥（のけ）の徳栄寺（住職代務  
永江妙光師）へ向いました。

参道入り口より行進すること約二キロ、上り坂の参道左右は、桜並木の公園となつており、徳宗寺は、福岡市街を眼下に、はるかに玄海

灘を望む風光絶可な景勝地、本堂  
前には早朝来つめかけた植信徒が  
ひしめていました。

講話布教後、早目に昼食をとり  
バスで博多湾にそつて、「生の松  
原」の中を走り、下山門の妙泉寺  
に到着しました。

住職門脇英正師は、かねて児童福祉施設「松風園」の孤児に対し、慈愛の布教をつゝけており、このことは、最近、日蓮宗新聞に大きく報道されたことがあります。

が、その孤児たちが門脇師を慕

つて、仏門に入る者も少くないといふ事実は、かくれた宗門布教の成果として賞讃さるべきであります。」

次は糸島徳永の宝樹寺（住職赤津瑞孝師）。このあたりは部落も点在する農村で、宝樹寺の本堂は、近代的な鉄筋コンクリート建築である。

リートで再建中でした。

大都会の中にもふさわしい此の本堂の外観を見る時、人心布教は都會でも田舎でも変りはないとい

うことを考えさせられると共に、土と共に生る農民のド根性と、そこに布教する者のたくましさを、痛感せずにはおれないものがあり

ま  
し  
た。

この日の最後の布教地は糸島高前原町農協前でバスを降り、擊鼓行進すること、およそ二キロ、さすがに布教の疲労は、かくしおすべくもありませんでしたが、疲労を感じずは感するほど、更に強く法鼓をうちながらました。

玉なす汗をぬぐいながら登りつ  
いた山腹の妙立寺には、折から梅  
の花が境内一杯、馥郁として香つ  
ていました。

ここで待機中の檀信徒に講話布教をし、甘酒の御供養に一息ついて、出発地点大通寺に帰着したのは午後四時すぎ。

延々八時間に及ぶ機動布教のあ

と、書院で夕食の御供養をうけた  
時は、さすがに、

「我等、今、菩薩道を行じ、安じ  
て此の飯食をうく、法悦感謝きわ  
まししなし」

という食法の文が、しみぐと  
あじあわれたことでした。

なおその夜、日高師は身延山本  
願人会福岡県支部長藤田恵久氏宅  
に一泊、翌る十二日は、博多東公  
爵日蓮大聖人銅像拝殿における月  
例通夜布教に出講。

講話は夜半の十二時まで、唐津  
法連寺の藤山英雅師と交代で行わ  
れ、更に引きつゞいて銅像事務所  
では、有志青年僧と共に、白熱化  
した日蓮教学研修座談会が、本尊

論を主題に、藤山英雅・英雄両師  
を中心として、三時半までつゝけ  
られ、大へん意味深いものがあり  
ました。  
△完△

## 東筑地区

### 轟く法鼓の威力

八幡 龍 潜 寺

松 尾 周 辉

二月十五日の東筑地区伝道布教  
にさきだち、十四日夕刻六時より  
龍潜寺において、来福中の日高師  
談会という順序でしたが、参加し

た檀信者の中に、青年以外の一般  
信徒の老人・婦人も多かつたせい  
か、講話内容は難解な法華經教学  
をさけて、日常信行の在り方、特  
に孝道にもとづいた先祖供養のこ

司会は、門司の大雄寺刀禪義昭

師。初め日高師の講話、その後、  
△完△

とが主論となり、靈的現証の事実をもつて大衆を信仰へ導入すべき糸口が強く主張され、「青年会運営の在り方」に関する質問に対しでは、

「あくまでも信行を中心として、祈りに徹することを決とすべきである」

と解明し、多大な感銘が与えられました。閉会は夜九時。

さて明くれば二月十五日、あたかも祇尊祭の聖日、この日を期して東京地区内、八幡・若松・戸畠方面の街頭伝導布教。

午前九時、八幡市瀬寿量寺に集合した寺院檀信徒およそ二百数十名は、四班に編成され、引野口

まで擊鼓行進し、街頭説法後、四台の貸切バスに分乗、穴生のアパート前で下車、これより八幡製鉄高層アパートの林立する中を擊鼓宣令しました。

行進は延々とつづきました。二百数十丁の法鼓の響は、地軸をゆるがすばかりでした。人々はアパートの窓ごとに顔を出し、或は外に飛び出して、配布する教筆を争いながら手にして、喜々としました。

若し、この行進に太鼓がなかつたならば、何の効果もなかつたことだろう、と思う時、今さらながら法鼓の威力を痛感せんにはおれませんでした。

これより、再びバスをつらね、一路若松へ向い、老松町の立宣寺（住職高崎芳麿師）に到着、商店街を擊鼓宣令して若松駅前よりバスに乗車、関門海峡を眼下に若戸大橋を渡り、戸畠区沢見中町の寂光寺（住職村上泰空師）に入り、本堂にて講話布教、そして中食。午後は寂光寺より戸畠天神町を行進、商店街のはずれよりバスに乗り、八幡の枝光駅前で下車、枝光商店街を行進して宮川公園に到り、次は八幡中央町アーケード街に法鼓をとどろかし、ここで行進団はバス二台ずつ二班に分れ、一隊は黒崎駅前商店街の布教、二隊は祇園町の布教。

両隊が龍勝寺に到着したのは午後四時、直ちに本堂で釈尊ネ槃法要を斎修、つゞいて日高師の法話解散したのは午後五時でした。

釈尊ネ槃の聖日を期して、終日

東筑地区街頭に擊鼓行進した、そ

の法鼓こそ、「擊鼓自然鳴」の經文の通り、本仏釈尊無作の仏事で

あり、大音声に唱えねいたお題目

も、実は本仏釈尊の因行果徳のお

題目であり、仏陀がみずから展開

する此の所作仏事に、私たちがそ

のお使として、我見もなく素直に

声をからし、汗を流し、足をひき

すり、太鼓を打つ手に、豆をつく

つて、至心に奉仕する時、その実

踰の中に、宗門の異体同心の実は

おのずから樹立されると共に、法華經は仏の御心のまにまに広宣流布するものである、という思いをおこなう新にした一日でした。

## 豊前地区 郷土に祈る

門司大雄寺

刀称義昭

二月十六日の日蓮大聖人御降誕の聖日、この日は豊前小倉市街の

街頭伝道布教。責任者は田川市大

法山天慎寺の藤山英雄師。

鋳物師町の立法寺（住職大庭智

明師）の門前では、午前八時より

日高師が宣伝カーのマイクを通して町内に向つて布教をつづける中

九時三十分、立法寺を出発、延

寺院各聖・檀信徒は続々と集つて来ました。

中には遠くバスや汽車で駆けつけた団体も少なからず、定刻の九時には二百数十名の多きを数え、本堂も書院も境内も、人波に埋つてしましました。

夕たる大行進は、小倉駅前の大門町妙乗寺（住職渡辺公完師）へ向いました。

妙乗寺は鍋かぶり日親上人の開いたお寺。ここで行橋市普門寺の木村円空師の説法があり、小倉駅頭では日高師の大獅子吼、そして行進は室町・京町・魚町とつづくアーケード商店街のまつただ中に、大音響をとどろかしました。

二流の玄囃旗を陣頭に、二十余名の僧陣は一列縱隊、二百を越ゆる檀信徒は二列縱隊、外側各班長の打ち下すバチさばきにあわせた法鼓は、一糸乱れず、一度も予行演習さえしなかつたにもかかわらず

、その行進は、眼もさめるばかり魏々堂々たるものでした。

檀信徒の中には、六十代・七十代の老人も決して少くはありませんでした。

然しそれら老人たちも、青年と同じように、整然と列を作り、躍然と足並をそろえ、鐘を輝し胸をはつて、大音戸にお通日を唱え、法鼓をあわせて打ちならす勇しい姿には、それが老人であるだけに却つて頭の下る思いを禁じ得ませんでした。

アーケード街には行進を見守る人垣が次々に出来ました。中には思わず合掌して見送る人々もあり、中にはあわただしく向けたカメラ

のシャッターを切る人々もいました。

た。

行進に参加した檀信徒の一人一

人は、何千年来、天災にも人災にも屈せず郷土を築き上げて来た私

たちの先祖の力と、その恩を偲ぶと共に、この郷土が速かに一山美の郷土となつて子孫に継承されるよう、先祖に祈り、子孫に祈り、縊じては郷土の立正安國に祈る、

その祈り一筋に行進したのでした

郷土の空にも、その地上にも、数知れない有縁無縁の靈がいます。

そうした靈は果して成仏しているでしようか。

郷土何十万大衆の中、法華經を如説に信する者は、大地の土に較

ぶれば、爪上の土のほどもありません。

その現実を思いあわすれば、郷

士の有縁無縁の靈の成仏した数もまた教えるほどしかないと申せま

しよう。

成仏を願いながらも成仏出来な

いでいる靈、それはやがて悪鬼悪

靈となります。ここに、

「災起り、難起る」

と、立正安國論に諭められる所以があります。

市街を擊鼓宣令する一人一人は

語らせたもうべし

という大聖人の御妙判にもとす

法華經に帰信するよう、その下種

結縁を折りました。

この一なる折りが、おのずから

整然たる行進となつて行つたので

す。

行進団は、旦過町の交差点で四

台のバスに分乗、これより新生町

の本釈寺（住職水上正賢師）へ向

いました。

本釈寺では、

行学二道を勵み候べし

行学絶えなば仏法ある可らず

我れもいたし人をも教化候へ

行学は信心より起るべく候

力あれば一文一句なりとも

別なれば、与同罪のがれがたきの

「心は日蓮と同意なれども、身は

いた藤山英雄師の痛烈なる法説が

あり、信心こそ行学二道の大本と

して感銘を深くしました。

中食後、赤坂大山の妙法寺（住職延本一雄師）へ行進し、ここで

は田川郡常立寺の早瀬円雄師の法話に、日蓮宗々徒の覺悟を新たにし、最後の行進は、小倉日銀前よ

り大阪町の真淨寺（住職中村正彦

師）へ展開され、二月九日より一

週間にわたる街頭伝道の有終の美を飾りました。

真淨寺では宗祖降誕会法要後、

日高師の一時間にわたる講演があ

り、

いて、一誇法の者を見ていさめな

いこと、及び未だ法華經を信じない者に信仰をすすめないことは、

誇法と同じ与同罪である」

と説明、更に

「本日は街頭に擊鼓宣令して、今

日一日の与同罪をまぬがれること

が出来た。今後とも機会ある」と

街頭撃鼓に祈り、また日常、家庭においても隣り近所においても

誇法の者の上に、また未信者者の

上に、一日も早く正法に帰依する

よう、陰に陽に祈りを捧げて行かねばならない。

そのことが大聖人の門下として

の菩薩道であり、せめてもの与同

罪をまぬがれることである」

と言葉を結びました。

立籠の余地もないほどつめかけ

た本堂の檀信徒は、講演終了後も

寂として声なく、暫し座を立つこ

とも忘れていました。

その後、書院において僧陣反省

会があり、二つ席上、

「百の論議よりも実踐行動の積み

重ねによつて宗門を興隆しよう」

「少くとも年一回は街頭伝道を実

施しよう」

「身延山を本とした布教によつて

宗門の結束を固めよう」

と、与論は沸騰しました。

なお、その夜半一時すぎまで、

九州青年会が開かれて、正法宣

布の具体案が練られ、今年の夏、

身延山別動隊が長崎全県下の布教

を実施するならば、その前後、北

九州においても再び街頭布教を展

開することが要望されました。

布教、それは誇法懲悔の底より

爆發するものです。いな、そうで

あらねばならない、ということが

再認識せしめられた今日、日の布

教であつたのです。

## 予告

次号には三月春休みに実施  
された関西方面における身

延山学生街頭布教紀行を掲  
載いたします。(編集部)

## 宗門を背負う 学生僧の道念

鎌倉市松葉ヶ谷 安國論寺 藤原玄通

本日、振替にて贊助会費と誌料

を送りました。病床にいるため左

手で書いていますので、読みずらい点があれば、お許し下さい。

驚峰は、ガリ版ズリの当初から残らず読破していますが、よくもこれまで立派な雑誌にしてくれた

ものと感動せざるを得ません。さ

すがに日高師の御指導よろしきた

めと、深く感謝いたします。

近き将来の宗門を背負つて立つ

学生僧の若き遺念を失わずに頑張

つて下さい。

今まで読んだ記事は、みんな良

いので（兄たり難し、弟たり難し）いずれを、どうのこうのと書うこととは先生には出来ません。みんな

な真実性があふれていて、うわすらりが少しもなく、本当に嬉しく思います。

だから、今までのような記事を今後も読けて頂きたいのです。

強いて言わせて頂くなれば、金權

政治、デモ政治、付け焼刃政治、

病床にありながらも、引きつゞ

泳ぎ上手政治、名譽欲政治、等々の政治に引き込まれないようにして欲しい、と思います。

また多数の人々に、この雑誌を購読するようにすゝめていますが

人さまに雑誌を読んで頂くことはなかなか困難なことです。

先生は、数多くの雑誌を読んでいますが、読み終ると、すぐに、しまつてしまします。

然し驚峰だけは、読み終つてからも、二十日も一ヶ月でも病床の枕元において、この人ならばと思う人たちには、この雑誌の意義をよく説明して、購読してくれるように頼んでおります。

いて読者倍増をやつて行きますか  
ら、鷺峰の学生諸君も、正法興隆  
のため、大いに頑張つて下さい。

## 釈尊こそ

### 久遠の本仏

大阪市中西広子

テレビで日本山々主藤井日達猊  
下はじめ御一行が、王舎城仏舍利  
塔の定礎式のため羽田空港より渡  
印されるニュースを見たし、身が  
しまるよう有難く思いました。  
それは胸が痛くなるような一刻で  
した。

「間釈尊」と題する自我偶講義を読  
ませて頂き、感激は更に一人の  
ものがござりました。

これに類する教説は、日頃から

有縁のお上人さま方々に教えて頂  
いているはずですが、つい聞き流  
しがちでありますところへ、誌  
上を通して今あらためて御説法を

せて頂きましたことを、心からお  
礼申上げるものでございます。

さつそく賛助会費と一年分の誌  
代、送らせて頂きました。今後の  
鷺峰を楽しみにしています。

ひたすら、それを祈っています。

(病床にて、七十八老)

ば読むほど、心にしみる思いの致  
したことございました。

日蓮大聖人さまは、法華經の明  
鏡により、釈尊こそ久遠の本仏で  
あるということを、歴史的事実に  
もとづいて大義明分を明かにされ  
ました。

靈山虚空会上の人間釈尊こそ、  
久遠の本仏であるという仏陀觀、  
そこから眞の法華經信仰が湧き起  
るのでないでしようか。

鷺峰誌を通して仏陀觀の深めさ  
せて頂きましたことを、心からお  
礼申上げるものでございます。

祝 鷺峰第二期生業  
身延山大學卒業

昨年八名の鷺峰第一期生について、十名の鷺峰第二期生が本年三月五日、身延山大学を卒業、半数が立正大学へ進学し、半数が布教第一線へ巢立つて行きました。こゝに読者と共に第二期生の卒業を祝福いたしたいと思います。

昭和四十年度

## 鷲峰贊助会員紹介

本誌発展のため温く御指導、御支援下さいます読者

皆様に厚く御礼申上げます。

特に御志納 御支援下さいました鷲峰贊助会員の方々には、こゝに御芳名を御紹介申上げ、謹んで衷心より感謝の意を表させて頂きます。

### 賛助会員御芳名

北海道	本間妙海	名古屋市	安井隆礼
千葉県	石井重吉	奈良県	阿知羅一郎
東京都	井田ミチ	大阪市	中西吉三郎
"	野崎康充	和歌山市	土橋通宏
"	有賀義雄	龍野市	寺田健二
横浜市	小池房三	福知山市	沢田覚象
山梨県	土屋貢	北九州市	津山つる
豊橋市	石橋明定	久留米市	井上イツノ

△前承二月二十八日現在▽  
敬称略・順不同

なお、初めての賛助会御加入者には賛助記念として

インド王室城仏舍利塔本尊として渡印いたしました、  
身延山金剛の秋尊像の記念写真(本誌表紙の写真四つ  
切り大)一葉を贈り申上げております。

## 本誌の発行所 身延へ還る

昨年の夏、本誌発行事務所を身延山久遠寺内より甲府市の妙本寺へ移転いたしましたが、本年二月号よりタイプ印刷から活版印刷にするため、印刷所を甲府より身延町梅平の藤田印刷所へ変更しました。これにともない発行も身延へ還し、波木井山麓にある木妙庵世話人遠藤喜男さま方といたしました。

從来、本妙庵への郵便物は一切、遠藤さま方に集収されていますので、鷲峰関係のすべての郵便物もここでを集められ、本妙庵へ運ばれます。これによつて今までのような事務の停滞は、今後一切なくなりました。今後の新発行所は左の通りです。

山梨県身延町波木井三区四一二五番地  
鷲峰会

## 編集後記

# 鷲峰——三月号

昭和四十年 第三卷 第二十一号  
通卷 第二十一号

定価 五十円 送料 十円

昭和四十年二月二十日 印刷  
昭和四十年三月一日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井 醒悟園本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

發行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰会 振替(甲府)二〇九三番

峰

「何時、何處にでも、一貫指令があれば全国より駆せ参じて、一丸となつて警戒宣令、正法獅子吼する青年僧侶を三十名つくれ、その時、日蓮宗は押しも押されぬ大日蓮宗となつてゐる」と。

いな、その時は、身延山を本として日本全土を風靡していることでしよう。

「海行かばみずく斃、山行かば草むす斃」地位も名誉も求めず、忍辱の衣をまとつて警戒宣令する青年僧三十名の従地涌出、それは決して遠い将来ではないでしょ。陸続として先輩につづいて行くことでしよう。

何故ならば、仏祖の願行に生きんとする鷲峰会の学生が、毎年わざからも身延山より巣立つて行つてゐるからです。後輩の学生もまた「鷲峰の法灯」を護りつゝ陸続として先輩につづいて行くことでしよう。

三月五日、身延山大学の卒業式がありました。その中より鷲峰会第二期生が十名、身延山を巣立つて行きました。

昨年卒業した八名の第一期生とあわすれば十八名の卒業生を出したわけですが、曾つて身延山岩間布教師

長がこう申しました、

「何時、何處にでも、一貫指令があれば全国より駆せ参じて、一丸となつて警戒宣令、正法獅子吼する青年

僧侶を三十名つくれ、その時、日蓮宗は押しも押されぬ

大日蓮宗となつてゐる」と。

いな、その時は、身延山を本として日本全土を風靡

していることでしよう。

誌代	半年分	三〇〇円	送料	六〇円
賛助会費	一年分	六〇〇円	送料	一二〇円
	一年分	三〇〇〇円	(分納可)	